

Title	臨床哲学の余白 [Vol.10]
Author(s)	本間, 直樹; 会沢, 久仁子; 桑原, 英之 他
Citation	臨床哲学のメチエ. 2002, 10, p. 42-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9263
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ぐずぐずしているうちに3シーズンがあっという間に去ってしまいました。「春夏秋冬」というカッコワルイ号ですが、『メチエ』最新号をお届けします。法人化をめぐって今、国立大学は大激震を予感し、阪大文学研究科も日々忙しさが加速してまいりました。そんななか臨床哲学研究室は鷺田・中岡・本間を中心に「臨床コミュニケーション」(16頁参照)プロジェクトにウツカリ手をつけてしまい、それに追われる毎日です。臨床哲学は幅広く哲学の問題を考える場所ですが、この「臨床コミュニケーション」プロジェクトは理論研究ではなく、社会のなかで具体的に機能し得るもの作っていかねばなりません。このところ海外製「対話」商品の輸入ばかりして、これではいかんと思ってい

た私ですが、これまでの対話関連の仕事をまとめ、本当に臨床に根ざしたコミュニケーションを考えるよい機会だと感じています。(本間)

臨床哲学で3年間ホスピスに関わって得てきたものを、福井高校や看護学校で伝えることができるようになり、うれしく思っています。しかし、哲学の学会に参加して、勉強不足を感じています。哲学研究や応用倫理学との関連で、臨床哲学とは?と改めて思ったりします。臨床哲学のプロジェクトも多く、また大きくなってきますが、入り込むだけでなく、外にも立って、自分たちの活動を見ていけたらと思います。(会沢)

勘違いで訪れたcommons前日、應典院は園児の会か少し早い七五三かと思われるほど中も外も、子どもや親御さんでごったがえす。2階ロビーで腰掛けていた父親らしきひとり、テンオウイン、テンオウイン、

と携帯電話で必死に繰り返している。commonsフェスタに参加して3年目、始まりの頃を思い返すに、ケイテンイン、と研究室の誰かに教わった記憶がなくもない。オウテンイン、と、ここでそっとつぶやいておけば、この編集後記も後生の為の備忘録ぐらいにはなるだろうか。

さて、今年のcommonsフェスタは「対話のレッスン」という大きなテーマが掲げられていた。今回の哲学カフェは進行役が私、テーマは「現代において、何かを信じるとはどういうことか?」。そのテーマの大きさと抽象度のためにすぐさま参加者が具体的経験へと立ち返り言葉にする作業に至るには難しかったが、「信じる」ということが宗教

よりも、科学に基づく知の根幹にも存在する営みとして

臨床哲学の余白

捉えられたことには正直驚いた。もう一つ、聴覚障害をお持ちの参加者からノートテイクをつけてほしいという要望が事前があり、まがりなりにも一応これに答えることができた。その準備段階及び終了後に直接本人から及びノートテイクから聞いた意見に多くを学ぶことができたのだが、反省点も課題も多い。人材の確保も含めて今後とも考えていきたい。(桑原)

福井高校は茨木市西福井が所在地なので福井高校なわけです。福井県とはなんの関係もありません。阪大最寄り駅の阪急石橋からバスで40分+徒歩10分の通学時間がかかります。ここ数年大学のそばに生息しつづけている私にとって、この時間はけっこう負担になっています。しかも、高校には冷房がないため夏は暑くてたいへんでした。阪大のろくでもないキャンパスが快適に思える今日この頃です。(三浦)